【Microsoft Power Platform】サービス概要

2025年9月30日

改訂履歴

版数	発行日	改訂内容
第1版	2025年7月31日	初版発行
第2版	2025年9月30日	スライド 43,46,47,49,50～54: 価格表記を削除

本資料の内容は 2025/9/30 時点のものです。製品のアップデートにより変更となる場合がございます旨ご了承ください。

Agenda

1. 前提情報
    1. 用語集
2. Microsoft Power Platformとは
    1. Microsoft Power Platformの全体像、概要
3. 各コンポーネントの概要
    1. Power Apps
    2. Power Automate
    3. Power BI
    4. Power Pages
    5. Copilot Studio
4. 利用シナリオ例
    1. 活用例①営業営業訪問記録とレポート自動集計
    2. 活用例②営業用製品ポータル＋問い合わせ対応Bot
5. ライセンス
    1. Power Apps ライセンス概要
    2. Power Automate ライセンス概要
    3. Power BI ライセンス概要
    4. Power Pages ライセンス概要
    5. Copilot Studio ライセンス概要

1. 前提情報

1.1. 用語集

本書で使用する用語及び略称を以下の通り定義します。

No.	用語	説明
1	Dynamics 365	Dynamics 365 は、Microsoft が提供する統合型のビジネスアプリケーションスイートです。企業の業務全体を支援するため、CRM（顧客関係管理）やSFA（営業支援）、ERP（基幹業務管理）をはじめ、マーケティング、顧客サービス、フィールドサービス、財務、サプライチェーンなど、さまざまな業務領域をカバーしています。これらの機能はクラウドベースで提供されており、必要な機能を柔軟に組み合わせることで、自社のビジネスモデルに最適なシステム構築が可能です。また、Microsoft 365 や Power Platform との高い連携性により、業務の自動化やデータ活用を促進し、生産性向上・業務効率化を強力に支援します。
2	デジタルトランスフォーメーション（DX）	企業が外部エコシステム（顧客、市場）の劇的な変化に対応しつつ、内部エコシステム（組織、文化、従業員）の変革を牽引しながら、第3のプラットフォーム（クラウド、モビリティ、ビッグデータ/アナリティクス、ソーシャル技術）を利用して、新しい製品やサービス、新しいビジネスモデルを通して、ネットとリアルの両面での顧客エクスペリエンスの変革を図ることで価値を創出し、競争上の優位性を確立することです。
3	AI Builder	Power PlatformでAIモデルを簡単に作成・利用できる機能。ローコードで、画像認識、予測分析、フォーム処理などのAIをアプリや自動化フローに組み込むことが可能。専門的な機械学習の知識がなくても、業務にAIを活用できます。
4	Dataverse	Power Platformの共通データプラットフォーム。アプリやフローで扱うデータを、安全かつスケーラブルに保存・管理できる。テーブル形式でデータを保持し、関係性やロールベースのアクセス制御も可能。Microsoft 365やDynamics 365とネイティブ連携します。
5	Data Connectors	Power Platformが外部のサービスやデータソースと接続するための仕組み。SharePoint、Excel、Outlook、Salesforce、Twitterなど、500以上のコネクタが用意されており、クラウド／オンプレミスの両方に対応。標準コネクタとプレミアムコネクタに分類されます。

1.1. 用語集

本書で使用する用語及び略称を以下の通り定義します。

No.	用語	説明
6	RPA	ソフトウェアのロボット（ボット）が、人間がコンピューターで行う繰り返し作業を自動で実行する技術。例えば、データ入力やシステム間の連携処理などを自動化し、作業時間の短縮やミスの削減に役立ちます。
7	webhook	あるシステムで特定のイベントが起きたときに、自動的に別のシステムへリアルタイムで通知やデータを送る仕組み。例えば、注文が入ったら自動で在庫管理システムに連絡するなど、システム間の連携を効率化します。
8	Azure AD B2C	Microsoftのクラウドサービス「Azure Active Directory」の一種で、企業が自社のWebサービスに外部の顧客やユーザーを安全にログインさせるための仕組み。GoogleやFacebookなどのSNSアカウントでのログインも可能です。
9	データマート	データマートは、組織のビジネスユニットに固有の情報を含むデータストレージシステムです。これは、会社がより大規模なストレージシステムに格納するデータの小規模で厳選された部分を含みます。
10	HTML	HTML (HyperText Markup Language) はウェブのもっとも基本的な構成要素です。 HTML はウェブページの基本レイアウトに従ってウェブページのコンテンツを記述し定義するものです。 HTML に隣接する他の技術としては、ウェブページの表示や表現を記述するもの (CSS) または機能や振る舞いを記述するもの (JavaScript) があります。

1.1. 用語集

本書で使用する用語及び略称を以下の通り定義します。

No.	用語	説明
11	CSS	カスケーディングスタイルシート (Cascading Style Sheets、CSS) はスタイルシート言語であり、HTML や XML（派生言語である SVG、MathML、XHTML などを含む）で記述された文書の体裁や見栄えを表現するために用いられます。CSS は、要素が画面上で (あるいは紙や音声といった別のメディア上で) どのように表現されるのかを定義します。
12	Java Script	JavaScript（ジャバスクリプト）とは、主にWebアプリ開発で使われるプログラミング言語です。Webページ上に動きをつけたり、ユーザーの操作に合わせて表示項目を変化させるなどWebブラウザ上での表現に特化しているのが特徴です。 JavaScriptはクライアントサイドと呼ばれるブラウザ側のプログラムの作成に多く使われています。
13	Python	Python（パイソン）はオープンソースのプログラミング言語の一つで、1991年に開発されました。シンプルで読みやすい構文をもち、数値計算からWebアプリ開発、AI開発など幅広い用途で利用できることが特徴です。 また、豊富なライブラリやフレームワークが多く活用しやすいことや、オープンソースで大規模な開発者コミュニティが存在していることから、初心者から専門家まで幅広い層に人気があります。
14	frame work（フレームワーク）	フレームワークとは、意思決定や分析、解決したい問題を特定の型に落とし込み、手順に沿って整理していくための、共通して利用できる思考の枠組みを意味します。
15	Power Fx	Power Platform で使われる数式ベースのローコード言語。Excel に似た文法で、UIの動きやデータの取得・制御を実装できる。Power Apps や Power Pages などで使用されます。

1.1. 用語集

本書で使用する用語及び略称を以下の通り定義します。

No.	用語	説明
16	IoT	IoTとは、「モノのインターネット」と訳され、インターネットを通じて、さまざまな物理的なデバイスや機器が接続され、データの送受信や制御を行う仕組みを指します。
17	ドリルダウン／ドリルアップ	ドリルダウンとは、概要レベルのデータから詳細レベルのデータへと階層的に掘り下げて分析する手法です。全体像から個別要素へと視点を移すことで、より正確な状況把握や問題点の特定がしやすくなります。ドリルダウン機能はBIツールに一般的に搭載されており、CRM（顧客管理）やSFA（営業支援）と連携させることで、営業パフォーマンスの最大化やリソースの最適化が実現可能です。ドリルアップとは、詳細レベルのデータからより上位の概要レベルへと階層をさかのぼって分析する手法です。個別のデータから全体の傾向やパターンを把握したいときに有効です。ドリルダウンと対になる操作で、BIツールなどの分析環境において、柔軟に視点を切り替えながら意思決定を支援する機能の一つです。
18	Azure Machine Learning	Azure Machine Learningはクラウドベースの機械学習プラットフォームであり、Microsoft Azureの一部として提供されており、データサイエンティスト、機械学習エンジニア、開発者が機械学習モデルの開発、トレーニング、デプロイメント、監視、管理を簡単に行える統合ツールセットです。クラウドベースの利点を活かし、機械学習プロジェクトを効率的に進めるための環境を提供しています。
19	オンプレミス データ ゲートウェイ	オンプレミス データ ゲートウェイとは、Microsoft Power Platformや Azure Logic Apps などのクラウドサービスと、社内ネットワーク上のデータベースやファイルサーバーなどのオンプレミス（社内設置）データソースを安全に接続するためのソフトウェアです。
20	VertiPaq	VertiPaq は、Power BI や SQL Server Analysis Services（SSAS）Tabular モデルで使われている 列指向のインメモリ・データエンジンです。データを高速に圧縮・格納し、分析やクエリを高速で処理できることが特徴です。

1.1. 用語集

本書で使用する用語及び略称を以下の通り定義します。

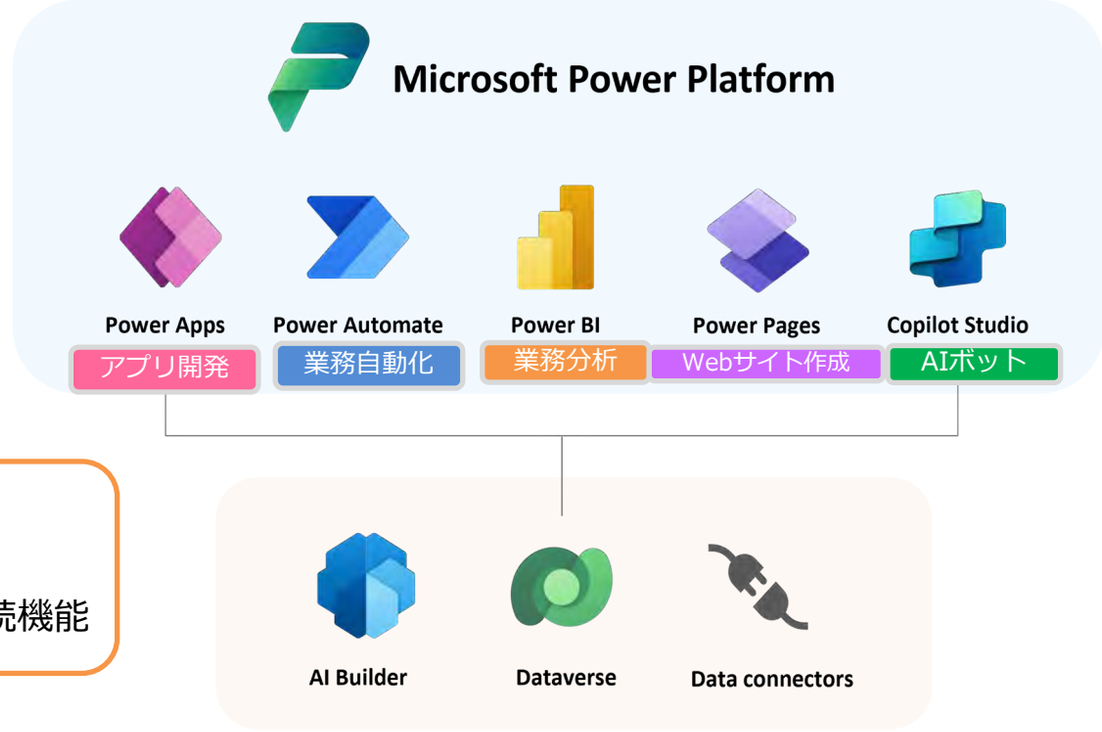
No.	用語	説明
21	Visual Studio Code	Microsoftが提供する無料のソースコードエディタ。Windows、macOS、Linuxで利用可能。軽量でありながら、拡張機能により高度な開発機能を追加できるため、さまざまなプログラミング言語（例：JavaScript、Python、C#など）の開発に対応できます。
22	モデル駆動型アプリ	モデル駆動型アプリ（Model-driven apps）は、Microsoft Power Apps のアプリの種類の一つで、あらかじめ定義されたデータ構造（データモデル）とビジネスロジックに基づいて自動的にUI（ユーザーインターフェイス）を生成するアプリです。もう一つの種類のキャンバスアプリは「画面を自由にデザインする」アプローチで、ユーザー体験を重視します。
23	データマート	データマートとは、特定の業務部門（例：営業、財務、マーケティングなど）のニーズに特化した、分析用のデータベースです。全社的なデータを統合する「データウェアハウス」と比べて、より小規模で目的が限定されています。Power BI のデータマート機能は、ノーコードでデータの取得、変換、モデリング、保存（Azure SQL Database 上）を一貫して行える機能です。エンドユーザーやアナリストでも扱いやすく、DAXやSQLでのクエリ実行や、自動更新、Power BI レポートとの連携が可能です。複雑なデータパイプライン構築なしに、部門単位でのセルフサービス BI を実現する手段として活用されます。
24	XMLA エンドポイント	Power BI のプレミアム ワークスペースで提供されるインターフェースで、外部ツール（例：Excel、SQL Server Management Studio など）から Power BI データセットに直接アクセス・分析・管理を行うために使用されます。 XMLA は「XML for Analysis」の略で、データの読み取りやメタデータの取得、スキーマ変更などの操作を標準的なプロトコルで行うための仕組みです。 Power BI においては、データセットの高度な分析や管理、または自動化ツールによる操作を可能にします。主に Premium ライセンスで使用可能です。

2. Power Platformとは

2.1. Microsoft Power Platformの概要

Microsoft Power Platform（以下、Power Platform）は、Microsoft 365 や Dynamics 365 とシームレスに連携し、ローコードで業務アプリの開発や業務プロセスの自動化、データの可視化などを実現できる統合プラットフォームです。Power Platform は以下の 5 つの主要製品で構成されています。

- Power Apps：社内業務に適したビジネスアプリをノーコードで作成
- Power Automate：定型タスクやワークフローの自動化を実現
- Power BI：データを可視化し、分析から意思決定を支援する BI ツール
- Power Pages：社外向けのWebサイト（ポータル）を簡単に構築
- Copilot Studio：社内外で活用できるAIチャットボットを作成



また、これらの製品は、以下の共通基盤によって支えられています。

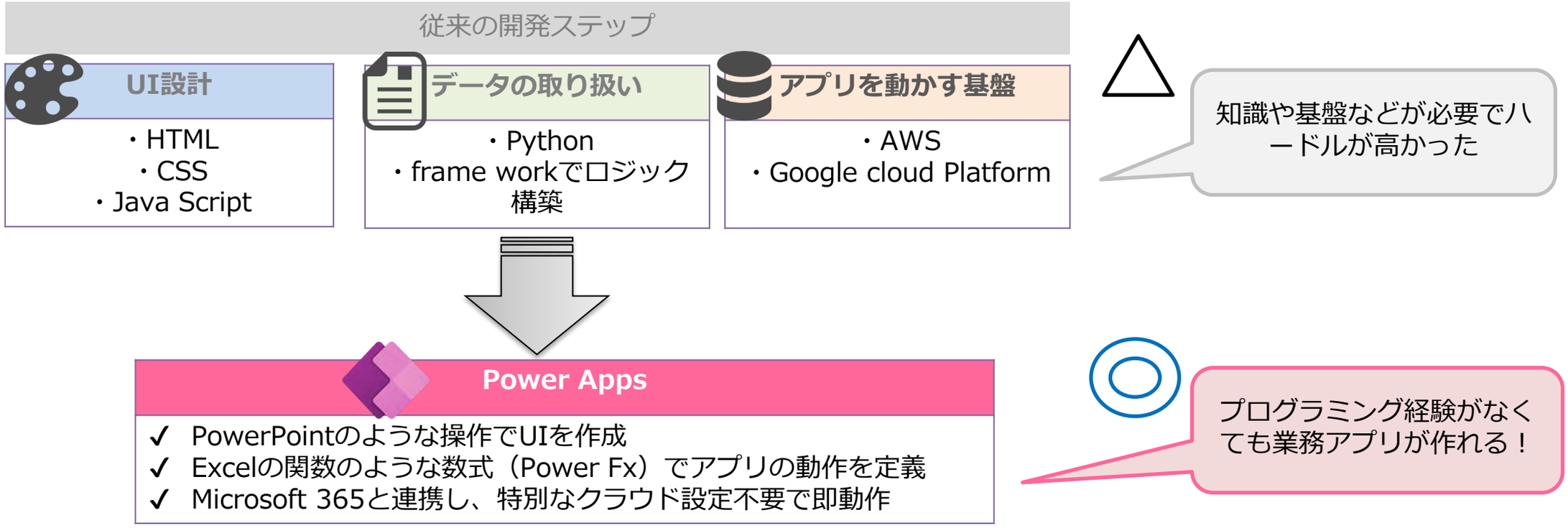
- AI Builder：ノーコードでAIモデルを利用し、予測・画像認識などを実装
- Dataverse：アプリやフローで利用可能な共通データプラットフォーム
- Data Connectors：Microsoft 365や外部サービスとの連携を容易にする接続機能

Power Platform の各製品は単体でも利用可能ですが、組み合わせて活用することで、より高度で柔軟な業務改善ソリューションを構築することができます。
また、Microsoft Teams や SharePoint などの既存の業務ツールとの親和性が高く、既存環境にスムーズに導入できる点も大きな強みです。
近年、企業のデジタルトランスフォーメーション（DX）や IT 人材不足への対応策として、ローコード／ノーコード開発のニーズが急速に高まっており、Power Platform はその有効な解決策として多くの企業に採用されています。

3.各コンポーネントの概要

3.1. Power Apps

Power Apps は、Microsoft社が提供する**ローコード開発プラットフォーム**で、プログラミングの経験がない人でも組織で活用できるビジネスアプリを作成することが可能です。アプリ、サービス、コネクタ、Dataverse等を組み合わせ、業務の効率化や自動化を支援します。
また、Power AppsはPower Platform上で動くSaaSサービスであるため、開発環境や実行環境の構築が不要です。



ハードルが高いとされる社内でのアプリ開発も、Power Appsならエンジニアでなくてもノーコードでアプリを作ることができます。

3.1. Power Apps

Power Apps は業務アプリを短期間・ローコード・低コストで作れる強力なツールですが、すべての開発ニーズに対応できるわけではありません。
ここでは「Power Apps でできること」と「できないこと」を解説します。

できること

- **モバイル・タブレット・PC対応の業務アプリ作成**
  作ったアプリはスマホやタブレットでもそのまま動作
- **社内掲示板の作成**
  リアルタイム更新、コメント機能などを活用可能
- **Excel・SharePoint・Teams などと連携**
  Excel、SharePoint、Teamsなどと簡単に接続できる
- **Power Automate との連携による業務自動化**
  承認や通知などの業務フローを自動化できる
- **DataverseやSQL Serverなどとの接続**
  さまざまな業務データと連携して活用可能

できないこと

- **高度で複雑なUIアニメーションやカスタム描画**
  業務向けUIに特化しているため、**スムーズな動きやリッチなアニメーション、自由なグラフィック描画**には対応していない
- **高速かつ大量データの処理**
  数万件以上のリアルタイム更新には限界あり。Power Automate や Power BI、Azureサービスなどとの連携で負荷分散・処理の最適化が可能。
- **社外ユーザーとの公開共有（制限あり）**
  アプリはクラウド上で動作するため、クラウドにアクセス権がない外部メンバーはアプリケーションを使用できず、アクセス権を付与する必要あり
- **秒単位のリアルタイム処理**
  IoTや高速トリガーには対応が難しいケースあり
- **フルカスタム開発（HTML/CSS/JS）**
  細かなレイアウト・スタイル制御は制限あり

ポイント

✓ 業務アプリの迅速な内製化には最適
✓ 本格的な開発が必要な場合は他ツールとの組み合わせが有効（例：Azure／Power BI）

3.1. Power Apps

Power Apps は、プログラミングの専門知識がなくても業務アプリを作成できる、**業務の効率化・内製化を強力に後押しするツール**であり、
特に、Microsoft 365 との高い連携性や、モバイル対応、関数による柔軟なロジック設計などが評価されています。
一方で、複雑な処理や高度なカスタマイズには制約があるため、**どの業務に向いているか、どのように運用すべきかを見極めることが重要**です。
ここでは、Power Apps の導入・運用に関する**メリットや注意点を解説します。**

メリット

- **繰り返し業務の自動化**
  アナログ・紙・メール業務をアプリで一元化し、作業時間を削減
- **短期間でアプリを展開可能**
  現場の課題をスピーディーに解決、開発待ちを解消
- **内製化による開発費削減**
  外注やシステム導入に比べて圧倒的に低コストで運用可能
- **現場主導のアプリ設計が可能**
  実際に業務を行うユーザーが自分で使いやすい形にカスタマイズ可能
- **既存のMicrosoft製品等の業務環境を活かせる**
  ExcelやSharePointなど、現在使っているツールと連携可能

注意点

- **アプリを作れる人材の育成が必要**
  ノーコードとはいえ、Power Fxやデータ設計には一定の学習が必要
- **アプリ乱立のリスク**
  各部門で自由に作れるため、全社管理のルールがないと重複や混乱の恐れ
- **誤設定による情報漏洩リスク**
  データ接続・共有範囲の設定ミスに注意が必要
- **大規模・高負荷処理には不向き**
  シンプルな業務アプリには最適だが、大規模開発には制約あり
- **機能によっては追加コストが発生**
  Dataverseや外部接続には別途ライセンスが必要になる場合あり

ポイント

✓ Power Apps は、専門知識がなくても業務アプリを短期間で構築可能
✓ 業務の効率化・内製化に効果的で、Microsoft 365 との親和性も高い
✓ 導入には、人材育成・運用ルール・全体管理の仕組みづくりが重要

3.1. Power Apps

業務アプリの内製化や現場主導のアプリ作成が注目される中で、Power Appsとよく比較されるツールとして
「kintone（キントーン）」があります。
どちらも「ノーコード・ローコード」で業務アプリを作成できる共通点がありますが、それぞれ特長や得意分野が異なります。
営業業務などの業務支援アプリを検討するにあたって、Power Appsとkintoneの違いを整理し、導入の判断材料とします。

kintoneとは

kintoneとは、サイボウズ株式会社が提供する、プログラミングの知識がなくてもノーコードで、業務のシステム化や効率化を実現するアプリがつくれるクラウドサービスです。主に以下のような操作、作業が可能となります。

- 業務に合わせたアプリ作成
  - ・顧客・案件データベースの管理
  - ・稟議・承認フロー
  - ・問い合わせ管理
  - ・日報管理　等
- コミュニケーション
  - ・社内コミュニケーション（掲示板）機能
  - ・wikiのような情報蓄積
- プラグイン・連携サービス
  - ・300種類以上のプラグイン
  - ・APIやWebhookを利用して、キントーンと外部サービス間でのデータ連携

エクセルやcsvからアプリ作成

掲示板機能

APIやWebhookでデータ連携

3.1. Power Apps

Power Appsとkintoneは、ノーコード・ローコードで業務アプリを作成できる共通点がありますが、それぞれ特長や得意分野が異なるため、導入を検討する際は両者の違いを整理することが重要です。

機能比較

比較項目	Power Apps	kintone	備考・補足
対応デバイス	PC／スマホ／タブレット	PC／スマホ／タブレット	
ノーコード開発	○（＋一部ローコード）	○	Power Appsは画面設計の自由度やExcelライクな関数による制御が可能で、柔軟なカスタマイズができる
データベース	Dataverse、SharePoint等と連携	kintone内のアプリデータベース	データ設計の自由度に差あり
Microsoft 365との連携	◎	△	Office製品との親和性はPower Appsが強み◎
標準機能の柔軟性	◎	△	UI設計・画面自由度に差あり
外部連携	多様（API/コネクタ利用）	kintone REST API（やや技術要）	kintoneはREST APIで外部連携は可能ですが、基本的にJavaScript開発や外部サービスとの個別設定が必要
ワークフロー	Power Automateと連携	標準ワークフローあり	複雑な自動処理はPower Automateが◎
ライセンス体系	Microsoft 365含む or 単体プラン	ユーザー数課金	
拡張性／開発自由度	◎	△	

3.1. Power Apps

選定ポイント

■Power Apps が適しているケース

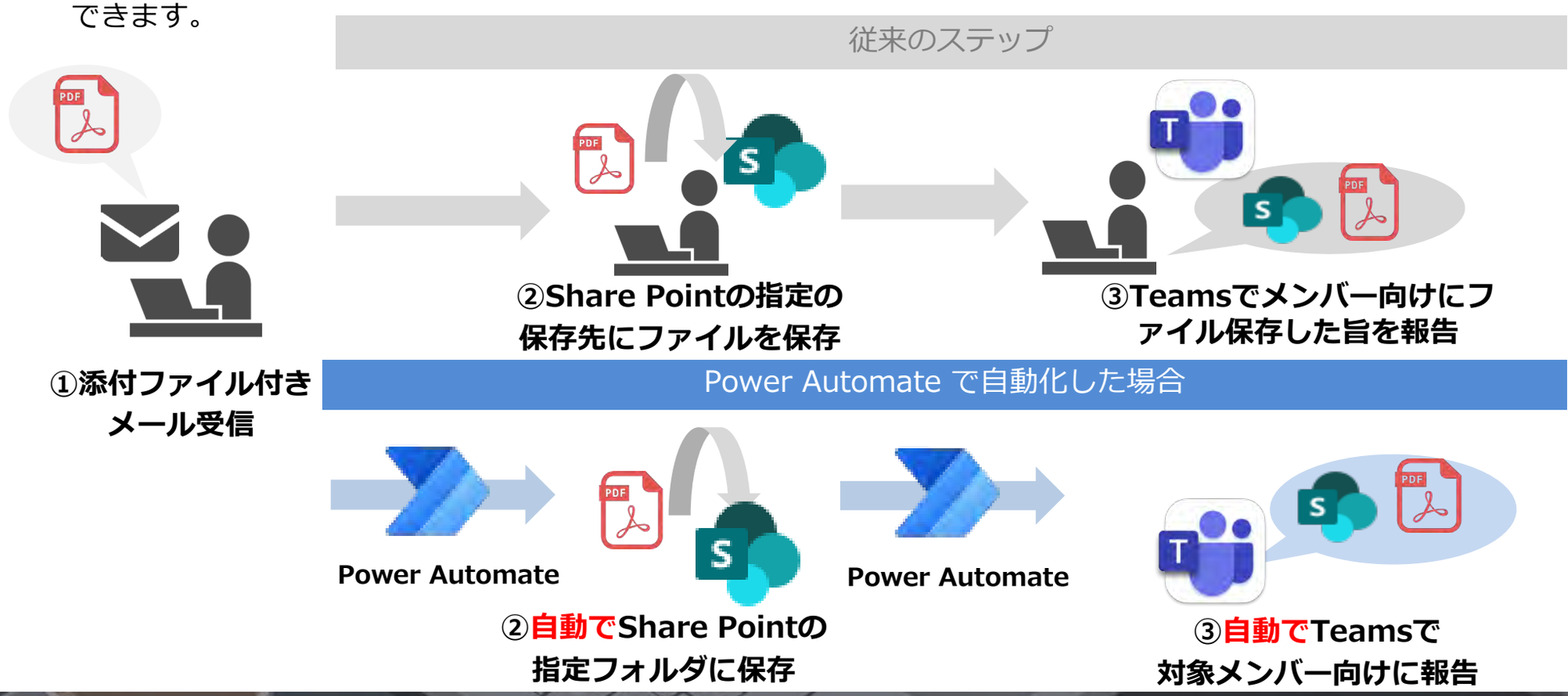
- ✓ Microsoft 365（Teams、Outlook、Excelなど）を活用している
- ✓ 部門ごとに自由度の高いアプリを迅速に開発したい
- ✓ フロー自動化や分析（Power Automate / Power BI）と連携したい

■kintone が適しているケース

- ✓ 国内企業で手軽に業務アプリを内製化したい
- ✓ テンプレートベースで簡単にアプリを作りたい
- ✓ ノンプログラマー中心のチームで活用したい

3.2. Power Automate

Microsoft Power Automate（以下、Power Automate）とは、マイクロソフトが提供する単純作業を自動化できる**RPA（ロボティック・プロセス・オートメーション）ツール**です。
「メールが届いたら自動で返信を送る」「新しいファイルが追加されたら通知する」など、**日々繰り返し発生する単純作業を自動化し、業務負担の軽減や生産性の向上を図ることができます。**
Power Automateはノーコード・ローコードツールのため、特別なプログラミング知識がなくても、直感的な操作で誰でも簡単に使いこなすことができます。



3.2. Power Automate

Power Automateには、大きく分けて**「クラウドフロー」「デスクトップフロー」**という2種類の自動化機能があります。

クラウドフロー

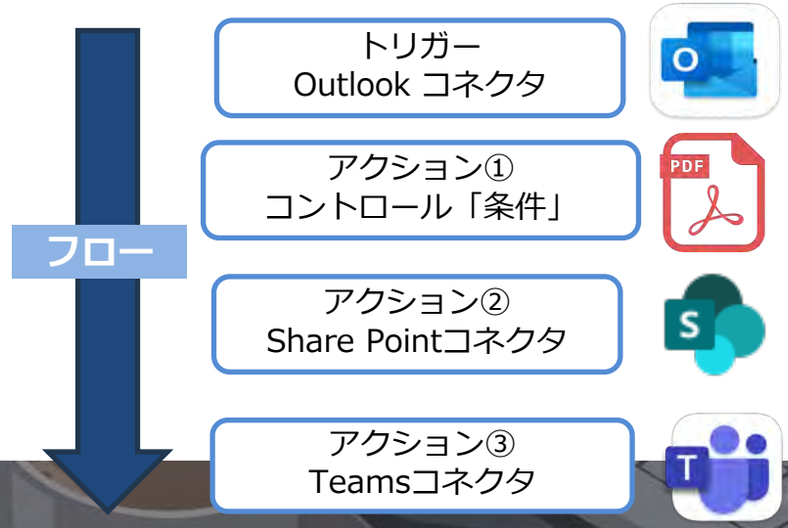
「クラウドフロー」は**クラウド上で操作・実行する自動化サービス**のことです。
一般的に「Power Automate」という名称で呼ばれるサービスは、このクラウドフローを指します。
SharePointやTeamsといったMicrosoft社が提供するサービス以外にも、X（旧Twitter）などのさまざまなクラウドサービスと連携して自動化ワークフローを作成できます。

デスクトップフロー

「デスクトップフロー」は、ローカルPCのデスクトップ上での処理を自動化するものです。
デスクトップ型のRPAツール「Power Automate Desktop」を利用し、普段PC上で行っているブラウザ操作やExcel操作、ファイル操作などを記録することで、作業の自動化が可能です。

フローの仕組み

Power Automateは、何かをトリガーにしてフローを実行し、予め設定したアクションを順番に自動処理してくれる「作業自動化ツール」です。
前のページの図を例にし解説します。



まず、「トリガー」とは自動実行のきっかけとなる開始条件のことで、最初に１つだけ設定します。
「アクション」はフロー内で実行される具体的な作業ステップのことで、トリガーをきっかけに自動処理されます。トリガーとは違い、フローの中で複数のアクションを設定することができます。

例では、トリガーにOutlookコネクタを使い、メールを受信したらPower Automateフローを実行開始します。①のトリガーに対して「条件」を使い、届いたメールの添付ファイル有無を判別します。
添付ファイル付きメールのみを処理対象とするため、添付ファイル有り/無しでフローを分岐させます。（特定の件名、差出人などの指定も可能です）
上記の条件で、添付ファイルがある場合はSharePointへ自動でアップロードします。
その後、対象ファイルを選択し、Teams を通じて、指定したメンバーへ「ファイルが保存された」旨の通知を送信することが可能です。

3.2. Power Automate

Power Automate は、Microsoft 365 と連携しながら業務の自動化を支援するツールです。手作業で繰り返していた業務を効率化する一方で、できないことや制限も存在します。ここでは、**「できること」と「できないこと」** を整理し、導入判断や活用のヒントとしてご紹介します。

できること

- **繰り返し作業の自動化**
- **稟議や申請の承認フローの構築**
- **通知の自動化**
- **ファイルの整理　　添付ファイルを指定フォルダに自動保存・分類（例：請求書の自動仕分け）**
- **スケジュール実行（時間指定で処理を開始）**
- **条件分岐処理：**条件によって実行内容を変更（例：「申請金額が10万円以上→部長承認」）
- **外部サービスとの連携：**Twitter, Slack, Google, Salesforce などとも連携可能（コネクタを利用）

できないこと

- **高度な計算・ロジック処理：**複雑な数式処理や分析は不得意。ExcelやPower BIと組み合わせが必要
- **大規模データの一括処理：**多すぎるデータ（例：何万件ものレコード）処理には時間や制限がある
- **リアルタイム反応（ミリ秒単位）：**即時性が求められる処理（例：オンラインゲームの応答など）は非対応
- **UI操作の自動化（デスクトップ操作）：**Webやアプリのクリック操作などは デスクトップ フローを使う必要あり
- **コードレベルの自由度：**自由にプログラミングできるわけではなく、GUI上の制約がある
- **セキュリティを伴う操作：（例：パスワードの保存）**

ポイント

✓ **Power Automate の本質は「つなぐカ」と「自動化のスピード」**
　・ Microsoft 365 ツールなどと連携し、日々のルーティン作業や通知、承認処理などが得意◎

✓ **ただし「複雑処理・大量処理・UI操作」は別のツールと組み合わせるのがベスト**
　・Power Apps、Power BI、Power Automate デスクトップなどと使い分けることで、より高度な業務改善へつながります

3.2. Power Automate

Power Automate は、業務の自動化や効率化を支援する非常に便利なツールです。
ただし、利用にはいくつかの注意点や制約もあるため、導入時にはメリットとリスクを正しく理解することが重要です。
ここでは、Power Automate の導入・運用に関する**メリットや注意点を解説します。**

メリット

- **定型業務を自動化できる：**毎回繰り返している作業（転記・通知など）を自動化し、時間を大幅削減
- **専門知識がなくても使える：**ノーコード／ローコードでフローが作成でき、非エンジニアでも導入可能
- **Microsoft 365との高い連携性：**Outlook、Teams、SharePoint、Excelなどと簡単に連携できる
- **エラーの削減：**人手によるミス（転記漏れ・通知忘れなど）を防止できる
- **柔軟なトリガーと条件設定：**イベント・スケジュール・条件分岐など細かな制御が可能
- **さまざまな外部サービスと接続：**Salesforce、Google、Slack、Twitterなど外部サービスとも連携可能（コネクタ使用）

注意点

- **ライセンスによって機能制限あり：**無料・有料で使える機能が異なる。Dataverse等のコネクタは有償ライセンスが必要
- **複雑な業務ロジックには不向き：**条件分岐や計算が複雑になると管理やメンテナンスが困難に
- **フローの実行回数に制限あり：**プランごとに1日の実行回数制限がある（上限に達すると止まる）
- **UIがブラックボックスになりがち：**フローの内容が一目で分かりづらく、属人化のリスクがある
- **エラー対応が難しい場合もある：**途中で止まったフローの原因調査・復旧には知識が必要
- **コネクタ依存のセキュリティ・制限：**外部サービスと連携する場合、認証や権限周りの理解が必須

ポイント

✓ **Power Automateは“定型作業の自動化”に最適なツール**
・通知、承認、転記などの「毎回同じ作業」に圧倒的効果
・IT部門だけでなく、業務部門自身が自分たちで改善できる点も大きな魅力
✓ ただし、**「使えば便利」ではなく“正しい範囲で使う”が重要**
・業務の全体像を把握し、「どこをPower Automateに任せるべきか」を見極める必要があります

3.2. Power Automate

Power Automate は、Microsoft 製品との親和性が高く、クラウドベースでさまざまな自動化を実現できるツールです。一方、日本国内で多くの企業が採用している RPA ツールの一つに**「WinActor」**があります。本スライドでは、業務自動化の選択肢としてよく比較対象となる WinActor と Power Automate を並べ、それぞれの特性を明確にし、導入・活用の検討に役立つ情報を整理します。

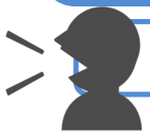
WinActor®

WinActorとは

WinActorは、NTT研究所にて開発された技術をベースに、NTTアドバンステクノロジ株式会社にて商品化した日本製RPAツールです。

Excel、ブラウザ、個別の業務システム等、Windows端末から操作可能なあらゆるアプリーケーション操作フローを記録し、PC操作を自動化するソフトウェア型のロボットです。シナリオと呼ばれる業務手順を作成することで、WinActorがその指示通りに業務を代行します。

WinActorの特徴



日本語対応

ドキュメント類を含め、サポート、操作画面も日本語で提供されている。

簡単な操作性

プログラミング等の特別な知識がなくても簡単にシナリオ作成することができるようGUIが提供されており、利用者は画面上でのドラッグ＆ドロップ、クリック操作で簡単にシナリオが作成できます。

幅広い対応ソフト

WinActorは４つの異なるインターフェイスを用いて直感的にシナリオを開発、改修することができます。

次のスライドにて、PowerAutomate WinActorの機能比較をまとめています。

3.2. Power Automate

Power Automate と WinActor の違い

項目	Power Automate	WinActor
実行環境	クラウド / デスクトップ	基本はオンプレミス（Windows端末）
連携のしやすさ	Microsoft 365、Teams、SharePoint などと高い親和性	基本的にローカルアプリ・システムとの連携が中心
UI 操作の自動化	可能（デスクトップフロー）	得意（Windowsアプリ操作に強い）
クラウドサービス連携	豊富（500以上のコネクタ）	限定的
フロー作成のしやすさ	GUI + テンプレート多種、初心者でも比較的簡単	フローチャート形式、やや技術的知識が必要
メンテナンス性	クラウドで一元管理、バージョン管理可	ローカルPCごとの管理になりやすい
ライセンス形態	月額・ユーザー単位（クラウド/デスクトップ）	買い切り / サブスク型 コスト構造に差がある
適した利用ケース	クラウドサービス連携、Microsoft 365 業務の自動化	画面操作の再現、レガシーシステムの自動化

選定ポイント

■Power Automate が適しているケース

- ✓ Microsoft 365 や Teams、SharePoint などを活用しており、それらとシームレスに連携したい場合
- ✓ クラウドベースでの業務自動化を推進したい場合
- ✓ 業務プロセスの可視化や一元管理を重視する場合

■WinActor が適しているケース

- ✓ 社内の多くの業務がオンプレミスで、Windowsアプリの画面操作が中心である場合
- ✓ 既存のシステムや業務フローを変更せず、早期に自動化を導入したい場合
- ✓ 日本語によるサポートや運用体制を重視する場合

3.3. Power BI

Microsoft Power BI（以下、Power BI）は、Microsoftが提供するビジネスインテリジェンスツールです。
ビジネスインテリジェンスツールとは、**データを取り込み・分析・加工し、経営戦略の意思決定を支援するツール**を指します。
Power BIは、**企業内に蓄積される膨大なデータから必要な情報を抽出し、グラフやチャートなどの見やすい視覚的なレポートに変換し、ダッシュボード上に直感的に表示させることができます**。以下がPower BIの主な特徴です。

主な特徴

レポート作成・共有

大量データを分析・可視化し、静的または動的なレポートを作成できます。ドラッグ＆ドロップでレイアウトを簡単に調整でき、会議資料や報告書としてPDF・Excel・CSV形式などで出力できます。PowerPoint形式での出力も可能です。また、Microsoft 365と連携してOneDriveやSharePointでの共有・共同編集もスムーズです。

多次元分析（OLAP）

複数の視点からデータを深掘りする多次元分析（OLAP）に対応しています。
•ドリルダウン／ドリルアップによる階層分析
•異なるデータソースを統合・整形するETL（Power Query）機能
専門知識がなくても直感的な操作で原因分析や傾向把握が可能です。

ダッシュボード機能

複数のグラフ・チャートをひとつの画面で集約表示できます。リアルタイムにデータが更新されるため、ビジネスの状況を常に可視化し、迅速な意思決定をサポートします。

予測分析

過去のデータをもとに将来の傾向を予測する時系列予測が可能です。
例：売上の推移予測、在庫切れのタイミング予測など。
※高度な予測にはAzure Machine Learning との連携も可能です。

データマイニング

AIや機械学習を活用し、大量データから隠れた相関関係やパターンを自動で抽出。通常の分析では見つけづらい情報を導きだします。

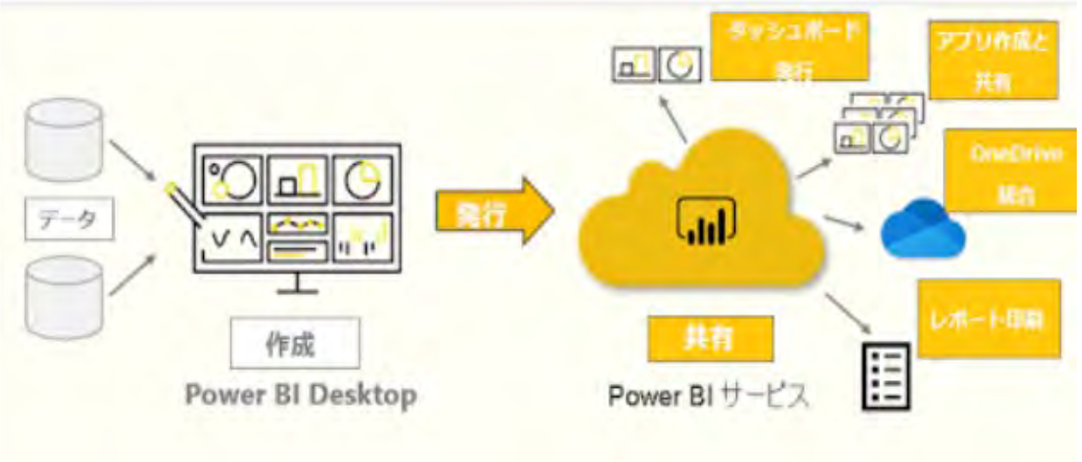
3.3. Power BI

Power BIの構成要素

Power BIは、目的や利用環境に応じて使い分けられる複数のツールで構成されています。

Power BI Desktop

Power BI Desktopは、ローカルコンピュータにアプリケーションをインストールして使用するデスクトップアプリケーションです。
さまざまなデータに接続することが可能で、Power Queryエディターでのデータの加工（列の追加・結合）やグラフなどに可視化した分析レポートを作成することができます。



Power BI Service

Power BI Service（以下、Service）とは、レポートの共有や管理、ダッシュボード作成を行うクラウドサービスです。
ダッシュボードがWeb上で利用可能なため、OSやデバイスの種類を問わずMicrosoft Edge、Google Chromeなど一般的なWebブラウザで利用できます。

Power BI Desktop を使用しなくても、ブラウザ上で動作する Power BI Serviseを使ってダッシュボードを作成・共有することが可能です。

Power BI Serviseは、クラウドベースの BI 環境であり、レポートやダッシュボードの閲覧・共有に加え、ある程度のデータ可視化機能も備えています。ただし、以下の場合は Power BI Desktop の使用が推奨されます

・高度なクエリやデータモデリング、レポート作成が必要な場合
・社内オンプレミスのサーバーやデータベースに接続する必要がある場合

Power BI Desktop の方がより高度な開発に対応しているため、
用途や目的に応じて使い分けることが重要です。

3.3. Power BI

Power BI は、さまざまなデータソースから情報を集約・可視化し、データに基づいた意思決定を支援する強力なBIツールです。特にMicrosoft 365との高い親和性により、業務の中で使いやすく、チーム内での共有や連携もスムーズに行えます。ここでは、**「できること」と「できないこと」** を整理し、紹介します。

できること

- **複数のデータソースに接続できる:** Excel、CSV、SQL Server、など、様々な外部データを統合可能。
- **データの整形・変換ができる**:不要な列の削除、日付形式の変換、列の分割・統合などがGUI操作で簡単に行える。
- **視覚的に優れたレポート・ダッシュボードが作成できる:** グラフ、KPIカード、マップなど豊富なビジュアルが使え、インタラクティブに操作可能。
- **リアルタイム・自動更新に対応:** データソースに応じて、レポートを定期的に自動更新（スケジュール更新）が可能。
- **Power BI サービスでの共有が可能:** レポートやダッシュボードをクラウドで公開・共有し、ユーザーごとのアクセス権限も設定できる。
- **モバイルアプリでの閲覧に対応**: iOS・Androidアプリから、いつでもどこでもダッシュボードを確認できる。

できないこと

- **データ入力・編集はできない**： Power BI は分析・可視化用ツールであり、Excelのようにセルへ直接データ入力・編集はできない。
- **複雑なワークフローや業務処理の自動化は苦手：** ワークフローや通知自動化などは Power Automate と連携して補う必要あり。。
- **一部のオンプレミスデータには直接アクセスできない（要ゲートウェイ）：** 社内のサーバー上のデータにアクセスするには「オンプレミス データ ゲートウェイ」の設定が必要。
- **レポートの双方向編集は不可（閲覧専用共有）：**レポートを他の人に共有した場合、その人は閲覧だけができて、編集はできません。他の人にも編集させたい場合は、編集権限を持つ「ワークスペース」にその人を追加して、共同編集できるようにする必要あり。

ポイント

✓ Power BI は幅広いデータソースに対応し、可視化や共有が得意なツール
✓ 高度な分析やオンプレミス連携には Power BI Desktop の利用が必要
✓ 限界や苦手な部分は他ツール（例：Power Automate）との連携で補完するのが効果的

3.3. Power BI

Power BI は、データの可視化・共有を効率化し、業務の見える化と意思決定の迅速化を支援するBIツールです。特に Microsoft 365 との高い連携性により、既存の業務環境に自然に取り入れやすい点も特長です。
ここでは、Power BI を導入・活用するうえでのメリットと注意すべきポイントを整理します。

メリット

- **多様なデータソースと接続可能：**Excel・CSV・クラウド・オンプレなど幅広く対応
- **可視化が簡単・直感的：**グラフやカード、マップなど豊富なビジュアルを用意
- **共有・権限管理が柔軟：**Power BI サービスを通じて、安全に組織内で共有可能
- **Microsoft 365 製品との高い親和性：**Teams、SharePoint、Excelとの連携がスムーズ
- **モバイル対応：**アプリでいつでもどこでもレポートを確認可能

注意点

- **データの直接入力や編集は不可：**Excelのような入力操作には対応していない
- **複雑な処理や自動化は非対応：**Power Automate など別ツールとの連携が必要
- **大規模データ処理には制約あり：**無料プランや共有環境には容量や速度の制限
- **オンプレ接続にはゲートウェイ設定が必要：**社内DBとの連携には追加設定が必要
- **すべてのユーザーに直感的とは限らない：**初学者にはトレーニングが必要な場合も

ポイント

✓ Power BI は、視覚的なデータ分析と共有に優れたツール
✓ 目的・環境に応じて Desktop / サービスを使い分けることが重要
✓ 苦手な領域は他ツールと連携して補うのが効果的

3.3. Power BI

多くの企業では、日常業務で Excel を使ったデータ管理や集計が当たり前になっています。しかし、データ量の増加やリアルタイム性のニーズが高まる中で、より高度な可視化や分析を求められる場面が増えています。
そこで、Excel ユーザーが次のステップとして選ぶべきBIツールとして、Power BIとの違いや優位性を整理することが重要です。

項目	Power BI	Excel
操作性	可視化に特化、直感的な操作が可能	数式や関数による手動集計
大容量データ対応	高性能エンジン（VertiPaq）により高速処理が可能	行・列数に物理的制限あり
複数データソースの統合	Excel、CSV、データベース、クラウドなど100種類以上対応	主にローカルファイル（CSV、Excel）など
データの更新性	自動更新スケジュールやリアルタイム接続が可能	手動更新が基本、一部マクロ等で対応可能
インタラクティブ性	グラフのクリックで他のチャートも連動	グラフのクリックで他のチャートも連動
共有・展開のしやすさ	Power BI Servise でクラウド共有、Web公開も可能	ファイル共有（メール、Teamsなど）に依存
セキュリティ・ガバナンス	Microsoft Entra IDやロール別アクセス制御が可能	基本はファイル単位の管理
分析の自動化	AI・機械学習との連携あり	マクロ・VBAで対応可だが高度な知識が必要

選定ポイント

■Power BI が適しているケース

- ✓ 複数システムやデータベースからのデータを統合して分析したい
- ✓ ダッシュボードでリアルタイムに業務のKPIを見える化したい
- ✓ チームでレポートを共有・更新しながら運用したい
- ✓ 手動集計やミスを減らし、効率化・自動化を図りたい

■Excel が適しているケース

- ✓ シンプルな集計や手元のデータ加工
- ✓ ピンポイントでの帳票作成やマクロ運用
- ✓ Power BI の準備が整うまでの一時的な利用

3.4. Power Pages

Power Pagesとは、ローコード・ノーコードでビジネス向けのWebサイトが作成できるツールです。
テンプレートベースで直感的に操作でき、プログラミングの知識がない方でも ページやフォーム、データ連携を含む動的なWebサイトを簡単に作成できます。

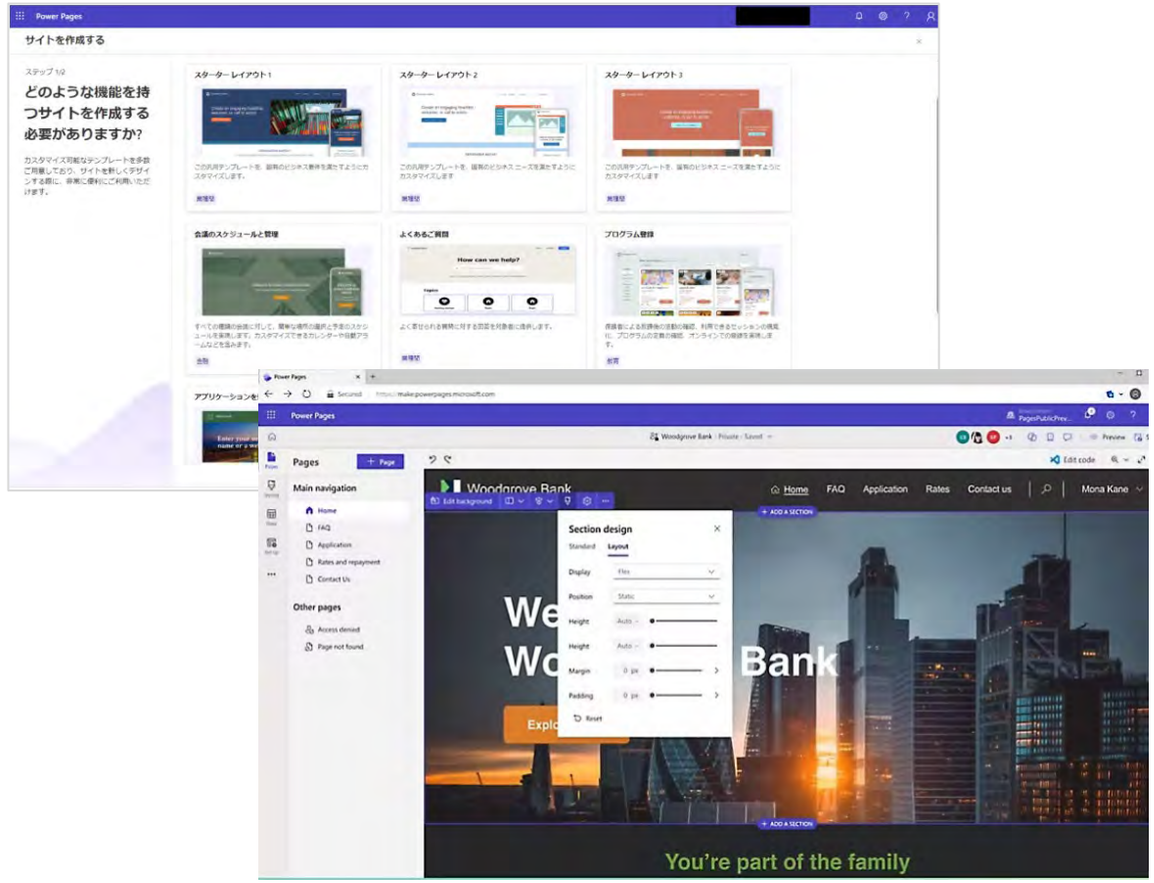
主な特徴

①ローコードで作成が可能：専門的な開発スキルがなくても、豊富なテンプレートやデザインツールを使って、フォーム付きのWebサイトを構築できます。

②高度なカスタマイズにも対応
開発者向けには、Visual Studio Code や開発者用ツールを利用して、HTML・CSS・JavaScript を含む柔軟なカスタマイズが可能です。

③ セキュリティとガバナンスに対応
Microsoft Entra IDやロールベースのアクセス制御を活用し、**セキュリティとコンプライアンス要件**にも対応可能。サイトは一元管理ダッシュボードで管理できます。

④ Power Platform や Microsoft 365 との連携
Power Automate、Power Apps、Dataverse、Teams などと統合し、フォーム送信後の自動処理やチャットボットとの連携など、業務プロセスの自動化・効率化が可能です。



3.4. Power Pages

Power Pages は、外部ユーザー向けのWebサイトをローコードで構築できるツールです。Power Platformの他製品（Power Apps, Automate, BI, Dataverse）と密に連携し、サイトやポータル構築を迅速に実現します。一方で、万能ではなく、カスタマイズ性や制限事項もあります。

できること

- **外部公開Webサイトの構築：**社外ユーザー向けの申請フォームや情報提供サイトを作成可能
- **Dataverseとの連携：**データの登録・参照・更新をDataverseのテーブルを通じて実施
- **ログイン機能の提供：**Azure AD B2Cやローカル認証を使ってユーザーアクセスを制御可能
- **アクセス制御の設定：**ユーザーごとに表示する内容や権限を設定可能（ロール管理）
- **Power Platform との統合：**Power Automateで処理の自動化、Power BIで可視化が可能
- **テンプレートの活用：**業務ごとのテンプレート（申請、問い合わせ、FAQなど）で短期間構築が可能。

できないこと

- **高度なWebデザイン／アニメーションには非対応：**一般的なCMSに比べデザインの自由度は制限される
- **複雑な業務ロジックはPower Apps等が必要：**複雑な処理はPower AutomateやPower Appsと連携して実現
- **無料では外部公開不可：**サイトを外部に公開するには有償ライセンスが必要（課金体系に注意）
- **他のDBとの直接連携は非推奨：**Dataverseが基本設計となっており、SQL Server等との直接接続には制限あり
- **内部システムとのリアルタイム連携は工夫が必要：**APIやカスタムコネクタを使わないと実現が難しい場合もある

ポイント

✓ Power Pages は「社外ユーザー向けのWebポータル」を安全かつ短期間で構築できるツール
✓ Power Platformとの連携により、業務プロセス全体をノーコードでつなげられるのが強み
✓ デザインや高度なカスタマイズには制限があり、用途と制約の理解が重要

3.4. Power Pages

Power Pages は、社外ユーザー向けのWebサイトを短期間かつ安全に構築できる、Microsoftのローコード Webサイト構築ツールです。申請・問い合わせ・登録などの業務をデジタル化し、パートナーや顧客との情報連携を効率化するのに適しています。ただし、導入にはいくつかの制約や前提もあるため、メリットと注意点を整理して理解することが重要です。

メリット

- **ノーコード／ローコードでWebサイト作成：**HTMLやCSSの知識がなくてもWebサイトを構築可能
- **社外公開に対応：**顧客やパートナー向けのフォーム・ポータルが構築できる（ログイン制御も可能）
- **Dataverse連携で安全なデータ管理：**データはMicrosoftの標準基盤（Dataverse）上で一元管理
- **Power Platformとの高い親和性：**Power AutomateやPower BIと組み合わせて、申請フローやデータの可視化が可能
- **セキュリティ・認証がMicrosoft基盤で安心：**Azure AD B2Cなどの認証機能に対応し、安全なサイト運用が可能

注意点

- **高度なデザインやUIは制限あり：**自由度の高いWebデザインや動的表現には不向き
- **外部公開にはライセンスが必要（有償）：**無料プランでは社外向けポータルの運用はできない
- **カスタマイズには一部技術的スキルが必要：**Liquid（テンプレート言語）やJavaScriptを使う場合あり
- **基本的にDataverse前提の構成：**他のDBとの連携には制限や追加設定が必要
- **更新やトラブル時の対応はPower Platformの知識が必要：**トラブルシューティングにはDataverseやPower Automateの理解が必要になることも

ポイント

✓ Power Pagesは「社外向けのフォーム・申請サイトをすばやく、安全に作れる」点が大きなメリット
✓ Microsoftの基盤（Dataverse、Microsoft EntraIDなど）を活用することで、セキュアで拡張性のある構成が可能
✓ 一方で、高度なWebデザインや細かい動的処理には不向きなため、用途を見極めて活用することが重要

3.4. Power Pages

Power Pages と Microsoft SharePoint の違い

Power Pages と Microsoft SharePoint (以下、SharePoint) は、どちらもWebサイトを構築するMicrosoftのサービスとして混同されやすいですが、それぞれ得意分野が異なります。本スライドでは、用途に応じた適切な選定ができるよう、両者の違いを比較します。

項目	Power Pages	SharePoint
主な用途	社外向けWebサイトの構築	社内ポータル・チームサイト
公開範囲	インターネット公開可（匿名アクセス対応）	基本は社内向け（Microsoft 365 アカウントでの認証）
カスタマイズ性	HTML/CSS/JavaScriptなどによる高度なカスタマイズ可能	テンプレートベース。カスタマイズは制限あり
データ連携	Dataverseとの連携が前提	Microsoft Lists やドキュメント中心
セキュリティ	Azure ADベースのアクセス制御＋匿名公開	Microsoft 365ユーザー管理に依存
ターゲット	顧客・パートナーなど外部ユーザー	従業員・社内チーム
開発難易度	ローコードだが多少の開発知識が必要	基本的に構築が簡単で初心者向け

選定ポイント

■Power Pages が適しているケース

- ✓ 外部顧客向けの申請・問い合わせフォームを公開したい
- ✓ 顧客やパートナー向けにログイン機能付きポータルサイトを作りたい
- ✓ Microsoft Dataverseのデータを安全にWebで共有したい

■SharePoint が適しているケース

- ✓ 社員向けに社内ポータルや掲示板を作成したい
- ✓ ファイル共有や部門間の情報連携を簡単に行いたい
- ✓ 専門的な開発リソースなしで簡単にサイトを作りたい（社内用途）

3.5. Microsoft Copilot Studio

Microsoft Copilot Studio（以下、Copilot Studio） は、ノーコードで自社業務に特化した AI チャットボット（Copilot）を構築できるツールです。
企業はこれを使って独自の AI エージェントを設計し、Microsoft 365 Copilot の機能を補完・拡張することができます。
Copilot Studio は、Azure OpenAI Service を通じて GPT-3.5 Turbo（大規模言語モデル）を利用しており、従来のFAQ型チャットボットに比べて、より自然で柔軟な応答を実現できます。
Microsoft 365 アプリや SharePoint、Power Automate、外部システムと連携させることで、社内業務の自動化、顧客対応の効率化、ナレッジ共有の高度化など、ビジネスプロセス全体のDXを加速します。

◇SharePoint やDataverse
…ナレッジの格納場所・情報ソースとして連携

◇Power Automate
…Copilot Studio から業務フローを呼び出す「アクション実行エンジン」として連携可能です。
例：ユーザーがチャットの回答に対して「役に立たなかった」とアンケートで回答した際、Sharepointに内容をリスト作成し、一覧化する 等

主な活用例

- 社内問い合わせ対応（IT / 人事など）
- 業務手順ナビゲーションBot
- 特にDataverseやPower Automateと連携し,データ取得/入力支援
- 商品・サービスのFAQチャット

3.5. Microsoft Copilot Studio

Copilot Studio は、業務に特化したチャットボット（Copilot）をノーコードで作成できるツールです。Microsoft 365 や外部システムと連携し、日常的な問い合わせ対応や業務処理の自動化に貢献します。一方で、万能ではなく「できること」と「できないこと」を理解したうえで導入・設計することが重要です。

できること

- **複数のデータソースに接続できる:**専門的なプログラミング知識がなくても、会話型アプリを簡単に作成可能。
- **生成AI（GPT）を活用した自然な会話**:AIによる文脈理解で、FAQやナレッジに基づいた自然な応答が可能。
- **Microsoft 365／Power Platform との連携:** SharePoint、Dataverse、Power Automateなどと連携し、業務プロセスを自動化。
- **社内外での活用（Teams、Web など）：**Teams や社内ポータル、Webサイトなど複数チャネルで利用可能。
- **特定のシナリオに応じた会話フロー設計**:申請・確認・案内など、業務に即したチャットフローを柔軟に設定可能。

できないこと

- **複雑な業務アプリの構築には不向き**：Copilot Studio は会話中心のツールであり、画面遷移やデータ入力を伴うような業務アプリは Power Apps などが適しています。
- **自己学習・自動改善機能は非対応：**一度構築したBotは、ユーザーの発言から自動で学習・改善するわけではなく、設計者が都度チューニングを行う必要があります。
- **マルチ言語対応は限定的：**日本語には対応していますが、複数言語を自動で切り替えたり、完璧な翻訳応答を行う機能は標準では備えていません。
- **ボイスチャット（音声会話）は未対応：**現時点ではテキストベースのチャットに特化しており、音声での双方向会話には対応していません。

ポイント

✓ Copilot Studioはノーコードでチャットbotを構築でき、業務効率化に有効
✓ 自然な対話や他システムとの連携が強みだが、AIへの過信はNG

3.5. Microsoft Copilot Studio

Copilot Studio は、専門知識がなくても ノーコードで高度なAIチャットボットを構築できるツールです。業務の問い合わせ対応や定型作業を自動化することで、人的対応の負担を軽減し、業務効率を大幅に改善できます。一方で、AI特有の注意点や連携設計のポイントもあり、導入効果を最大化するには適切な設計と運用の工夫が必要です。

メリット

- **ノーコードで開発可能：**プログラミング不要で、業務部門でもチャットボットを作成・運用できます。
- **Microsoft 365や外部システムと連携：**SharePoint、Dataverse、Power Automate などと連携し、業務プロセスに統合可能です。
- **生成AIを活用した自然な応答：**GPTベースのAIにより、柔軟かつ自然な会話が可能です。
- **多様なチャネルに対応：**TeamsやWebサイトなど、さまざまな場所で利用可能です。
- **業務問合せや申請処理の自動化：**社内のよくある問合せや定型処理をBotで自動化し、人的対応コストを削減できます。

注意点

- **高度な連携には設計スキルが必要：**Power AutomateやDataverse連携など、業務プロセスの理解と設計力が求められる場面があります。
- **AIの回答は常に正確とは限らない：**生成AIの性質上、誤った情報を出力するケースもあるため、重要な業務での活用には内容の検証が求められます。

ポイント

✓ Copilot Studioはノーコードで業務Botが作れるツール
✓ Microsoft 365や外部サービスと連携し、問い合わせ対応や申請業務を自動化
✓ 導入はしやすいが、活用の幅を広げるには設計力と運用体制がカギ

3.5. Microsoft Copilot Studio

Copilot Studio とCopilot for Microsoft 365 の違い

Microsoft が提供する生成AIには複数の製品が存在しており、特に「Copilot for Microsoft 365」と「Copilot Studio」は混同されやすいツールです。
どちらも業務の効率化や生産性向上を支援するものですが、目的・使い方が異なるため、機能比較と選定ポイントについて解説します。

項目	Copilot Studio	Copilot for Microsoft 365
概要	独自のAIチャットボットをノーコードで構築	Microsoft 365 アプリ内でのAIアシスタント
主な用途	社内問い合わせ・業務フローの自動化・BoT作成	Microsoft 365 アプリ内での文書作成や要約支援
カスタマイズ性	企業独自のワークフローやシステム連携を反映した設計が可能で、業務プロセスに応じたカスタマイズが可能	基本機能を利用（カスタマイズ不可）
データソース連携	Power PlatformやAPIで柔軟に連携	Microsoft Graph（Outlook、SharePoint等
対象アプリケーション	Microsoft 365に加え、Webサイト、社内イントラ、Teamsなど複数のチャネルで利用可能	Word、Excel、TeamsなどMicrosoft 365 アプリ
ノーコード開発	あり（設計者向け）	不要（利用のみ）
学習・改善機能	設計者による手動改善可能	Microsoft 側の改善に依存

選定ポイント

■Copilot Studioが適しているケース

- ✓ 業務プロセスやチャットボットなど、カスタムのAIアプリケーションを構築したい
- ✓ 顧客対応など、自社独自の対話フローや業務に特化したAIを作りたい
- ✓ Power Platform や外部API、業務システムと連携した高度なフローが必要

■Copilot for Microsoft 365が適しているケース

- ✓ ExcelやWord、Outlookなど、Microsoft 365 アプリケーションを日常的に使っている
- ✓ 特別な開発をせず、すぐにAIの支援を活用したい
- ✓ 会議の要約やメールの下書き作成など、日常業務の効率化が目的

4. 利用シナリオ例

4.1. 活用例

各コンポーネントを使用した、実際の活用例（ユースケース）を2件ご紹介いたします。

活用例①営業訪問記録とレポート自動集計（Power Apps / Power Automate / Power BI / Dataverse）

■概要：営業担当者がモバイル端末から訪問記録を入力し、データを蓄積・可視化・分析まで一気通貫で行う仕組み。

■使用ツールと役割：

Power Apps：営業がスマホやタブレットから訪問内容を簡単に入力

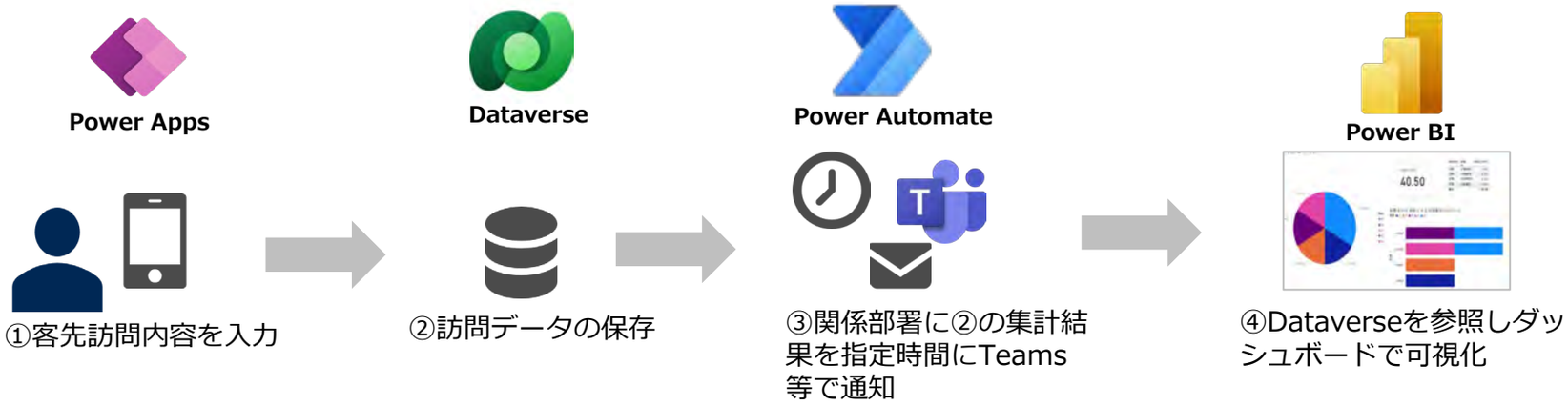
Dataverse：訪問データの保存先（共通データ基盤）

Power Automate：入力データを元に関係部署へアラート通知や集計処理を自動化

Power BI：訪問件数、受注見込み、地域別傾向などをダッシュボードで可視化

■効果：

◇日報の手間を大幅に削減　◇データに基づいた営業戦略立案が可能　◇入力～分析までのスピード向上



4.2. 活用例

活用例②営業用製品ポータル＋問い合わせ対応Bot（Power Pages / Copilot Studio / Dataverse）

■概要：営業担当向けの社内ポータルを Power Pages で構築し、製品情報や提案資料、価格表などを集約。さらに Copilot Studio でAIチャットボットを作成し、製品や資料に関する質問に自然言語で対応可能にする。

■使用ツールと役割：

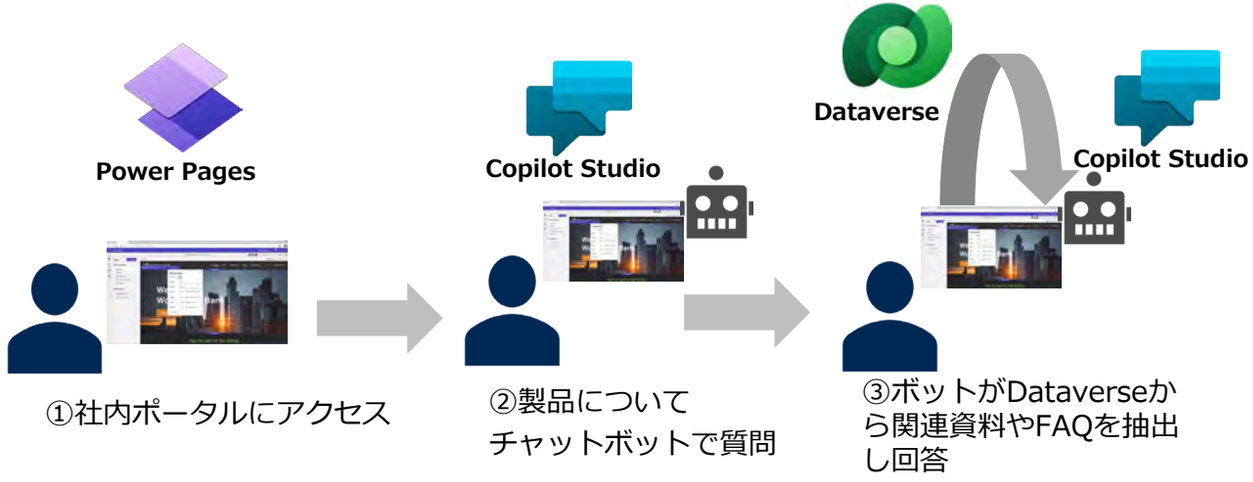
Power Pages：営業向け社内ポータルサイトをローコードで作成

Dataverse：製品データ、資料、FAQなどの一元管理

Copilot Studio：営業支援用チャットボットを作成（例：「おすすめ製品は？」「最新版の提案資料ある？」などに対話形式で回答）

■効果：

◇営業担当が資料や情報を即時入手することが可能　◇Bot が対応するため、資料問い合わせの属人化を防止　◇情報更新も Dataverse を通じて一元管理可能



5. ライセンス

5.1. Power Apps ライセンス概要

Power Apps の利用には、大きく分けて**「Microsoft 365 や Office 365 に含まれる標準機能」**と、**「スタンドアロンの有料ライセンス（Premium）」**の2つのパターンがあります。

Microsoft 365/Officeに含まれるPower Appsの機能

これらのライセンスには、**SharePoint・Excel・Outlook・OneDrive など、Microsoft 365 のサービスと連携した簡易なアプリ**を作成・実行することができます。例えば、以下のような**業務内の小規模な改善に向いたアプリ**が構築可能です。

- SharePoint リストをカスタマイズした入力フォームアプリ
- Excel ファイルを参照する業務記録アプリ

ただしこの形態では、

- Salesforce や SAP などの**外部サービス連携**
- Dataverse や SQL Server などの**高機能データベースとの接続**
- モデル駆動型アプリの開発

など、**本格的な業務アプリやシステム連携を伴う構成には制限**があります。

スタンドアロンライセンス（Power Apps Premium）

一方で、スタンドアロンの Power Apps Premium ライセンスを利用することで、以下のような高度な機能が利用可能になります。

- Salesforce や Oracle などの**プレミアムコネクタとの連携**
- **Dataverse** を活用した業務用データベース構築
- **モデル駆動型アプリ**による、複雑な業務アプリのローコード開発
- 開発／本番など**複数環境の切り分け**
- Power Pages や Power Automate、AI Builder との統合

これにより、**部門単位での業務効率化から、企業全体の業務改革や業務基幹システムの一部代替まで**、柔軟に対応できます。

また、Power Apps Premiumライセンスには2000ライセンス以上の大口契約用と、2000以下のライセンス用の2つの提供形態があります。
違いには主に「課金単位（契約形態）」だけであり、機能面では同じです。

5.1. Power Apps ライセンス概要

ライセンスプラン比較

以下の表では、Microsoft 365 / Office 365 に含まれる機能と、スタンドアロンライセンス（Power Apps Premium）で提供される機能の違いを比較しています。

プラン	*Microsoft 365 E3 E5 / Office 365 E3/E5	Power Apps Premium (月額課金/ユーザー)	Power Apps Premium （最小*2000シート/年間契約）
Canvas アプリの作成・利用	● （Dataverse以外のデータソース）	● 可能	
Model-driven アプリの作成・利用	✕ 利用不可	● 可能	
Dataverse 利用（作成・参照・更新）	✕ 利用不可	● 可能	
カスタムページの使用（Model-driven内）	✕ 利用不可	● 可能	
自動化（Power Automate フロー）	● 標準コネクタ利用可	● Premiumコネクタ含め利用可	
Premium コネクタ利用	✕利用不可（要Premium）	●可能	
AI Builder 利用	✕利用不可	● 可能	

*補足
「シート」とは、「ユーザーごとのライセンス」＝seat-based licensing（座席数課金モデル）の「seat」のことです。「最小2000シート」というのは、Power Apps Premium ライセンスを 2000人以上のユーザーに付与するような大規模な利用を指しています。

5.1. Power Apps ライセンス概要

＊補足

■Microsoft 365 / Office 365 ユーザーは、SharePoint や Excel Online、Outlook などの 標準コネクタに限定した利用となり、Dataverse や Premium 機能の利用には制限があります。

■Power Apps Premium ライセンスは、業務アプリの自由な構築・利用（Canvas/Model-driven）、Dataverse活用、外部API接続など、すべての機能をカバーしています

まとめ

■Microsoft 365/Office365 に含まれる Power Apps

✓ SharePoint や Teams 連携の簡易キャンバスアプリ作成が可能。Dataverse やプレミアムコネクタは利用不可で、軽い業務改善向け。

■Power Apps Premium

✓ Dataverse 利用やプレミアムコネクタ対応、モデル駆動型アプリ作成が可能。中小規模組織の幅広い業務アプリに対応。

■Power Apps Premium（最小2000シート）

✓ 大規模組織向けの大口契約モデル。基本機能はスタンドアロンと同じで、コスト最適化と大量ユーザー利用に適している。

5.2. Power Automate ライセンス概要

Power Automate の利用には、Power Appsと同様に、大きく分けて **「Microsoft 365 に含まれる標準機能」**と**「スタンドアロンの有料ライセンス（Premium/Process）」** の2つのパターンがあります。

Microsoft 365/Office365に含まれるPower Automateの機能

Microsoft 365（例：E3/E5、Business Standard など）には、Power Automate の基本的なクラウドフロー機能がまとめられています。
このライセンスでは、Outlook、SharePoint、Teams、Excel など Microsoft サービス間の自動化を簡単に構築できます。
例えば、

- Teams にメンションが届いたら、Outlook にメール通知
- SharePoint に新しい項目が登録されたら、上司に承認依頼を自動送信といった、日常業務の中での軽微なタスクを効率化できます。

ただしこの形態では、Salesforce、Dataverse、SAP、Oracle DB などとの連携（Premium コネクタ）Power Automate Desktop（RPA）によるPC操作の自動化AI Builder による画像・文書の自動処理など、高度なシステム連携やデジタル業務改革には制限があります。

スタンドアロンライセンス（Power Automate Premium / Process）

スタンドアロンの Power Automate Premium または Process ライセンスを利用すると、以下のような機能が利用することができます。

- Premium コネクタを使って、Salesforce、SQL Server、SAP などと連携
- Dataverse に格納されたデータを条件にした分岐・制御処理
- Power Automate Desktop によるロボティック・プロセス・オートメーション（RPA）
- 無人実行（Unattended）による24時間365日稼働の自動化フロー
- AI Builder を活用した請求書データ抽出や画像認識フロー

これにより、部門単位の業務効率化にとどまらず、全社横断の業務プロセス自動化（DPA）や、レガシーシステムとの連携、AI・RPA導入によるDX推進まで幅広く活用可能です。
Premium、Processプランの違いについて、次のページで説明いたします。

5.2. Power Automate ライセンス概要

スタンドアロンライセンスには以下の3種類がありますので、以下にそれぞれの特徴をまとめています。

スタンドアロン ライセンスプラン

項目	概要	主な対象
Power Automate Premium	**ユーザー単位のライセンス**。1人のユーザーが複数のフロー（クラウドフロー／デスクトップフロー）を柔軟に利用できる。個人業務や部門単位の自動化に適している。	日常的に自動化業務を実行する個人や部門ユーザー
Power Automate Process	特定の業務プロセスを複数ユーザーで共用する前提の課金モデル(プロセス単位)。 特定の業務プロセスに対して、複数ユーザーが共有して使うフローを作成・実行できる。	RPAやバックエンド業務の集中管理、部門横断プロセス自動化
Power Automate Hosted Process	通常の Process ライセンスと異なり、**クラウド上でホストされた仮想マシン（VM）とともに RPA（デスクトップフロー）を実行する環境がセットで提供される**ライセンスです。Hosted Process は、Unattended デスクトップフローの迅速な導入を目的としたソリューションで、仮想環境の構築・保守にかかる手間を削減できます。	インフラ構築をせずにRPAを導入・拡張したい企業

*補足
ボット：1つのボット = 1台の仮想マシンやPC上で動く自動処理エージェントのようなもので、人の代わりに自動的に処理（クリック、入力、コピーなど）を行う。複数のユーザーがその1台のボットを共有してもOK。

5.2. Power Automate ライセンス概要

ライセンスプラン比較

以下の表では、Microsoft 365 / Office 365 に含まれる機能と、スタンドアロンライセンスで提供される機能の違いを比較しています。

プラン	*Microsoft 365 Business Basic/Standard/Premium E1/E3 /E5 Office365 E1/E3/E5	Power Automate Premium	Power Automate Process	Power Automate Hosted Process
クラウドフロー作成・実行	●可能	●可能	●可能	●可能
デスクトップフロー（RPA）	✕ 利用不可	●可能	●可能	●可能
標準コネクタ利用	●可能	●可能	●可能	●可能
プレミアムコネクタ利用	✕ 利用不可	●可能	●可能	●可能
Dataverse 利用	▲（制限あり）	●可能	●可能	●可能
外部サービス連携（Salesforce等）	✕利用不可	●可能	●可能	●可能
トリガー頻度制限	あり	なし	なし	なし
共有フロー利用（プロセス単位）	✕利用不可	▲（共有困難）	●可能	●可能
ホスト型 VM 付き RPA	✕利用不可	✕利用不可	✕利用不可	●可能
Dynamics 関連業務フロー	▲（制限あり）	●可能	●可能	●可能

5.2. Power Automate ライセンス概要

以下に、Microsoft 365 / Office 365 / Dynamics 365 に含まれる機能と、スタンドアロンライセンスで提供される機能のについてポイントをまとめました。

まとめ

■Microsoft 365/Office365 に含まれる Power Automate

- ✓ 標準コネクタ（SharePoint, Excel, Outlook など）との連携が中心
- ✓ 軽微な業務改善・フォーム作成用途に最適
- ✓ Dataverse やプレミアムコネクタ利用には不向き
- ✓ 追加コストなしで始められる

■Power Automate Process

- ✓ プロセス単位で共有の自動化フローをチームで利用可能
- ✓ RPAやプレミアムコネクタを含むが、ユーザー数が多い場面でコスパ◎
- ✓ 業務単位での自動化運用や共用PCでの実行に向いている
- ✓ ユーザーライセンス不要で、特定の業務専用化に最適です

■Power Automate Premium

- ✓ ユーザー単位で強力な自動化機能を利用可能
- ✓ RPA（デスクトップフロー）、プレミアムコネクタ、Dataverse が使えます
- ✓ 外部サービスや大規模なシステム連携にも対応
- ✓ 開発者や高度な自動化ユーザーに向いています

■Power Automate Hosted Process

ユーザー単位で強力な自動化機能を利用可能

- ✓ Process プランに「ホスト済み仮想マシン（VM）」が付属
- ✓ 自社でRPA用PCを用意せずにクラウド実行が可能
- ✓ ITインフラの構築負担を減らし、スケーラブルな自動化が実現

5.3. Power BI ライセンス概要

Power BI は、以下の3つのライセンスモデルで利用可能で、用途や予算に応じて選べます。なお、 Microsoft365 E5、Office365 E5はPower BI Proを含んでいます。以下のそれぞれのプラン内容と、次のページで詳細の比較を行っています。

主なライセンスプラン

項目	概要	主な対象
Power BI Pro	Microsoft 365 E5 および Office 365 E5 に含まれている、レポートの作成・共有・共同編集が可能な標準的ライセンスです。 Teams や Excel、Power Platform などと統合でき、組織内の情報可視化やコラボレーションに適しています。	業務部門や中小規模チームの BI 利用者
Power BI Premium Per User	Power BI Pro のすべての機能に加え、大規模データセットや AI 分析、ページ分割レポートなどが利用可能な上位プランです。 容量単位の Premium よりも個人単位での導入がしやすく、部門単位の高度分析に向いています。	より高度な分析が必要な部門・アナリスト
Power BI Embedded	Power BI のビジュアルをアプリケーションに組み込みたい ISVや SaaS 提供事業者向けのプランです。 ユーザー数ではなく、実際のリソース消費量に応じて課金されます。	ISV、アプリ開発者、SaaS提供事業者

まとめ

■Power BI Pro

- ✓ M365 E5 に含まれる（追加費用なしで利用可能）
- ✓ Power BI サービス上での共有・コメント・共同作業が可能
- ✓ Teams や SharePoint との連携で業務の可視化を促進

■Power BI Premium Per User

- ✓ AI 分析、AutoML、ページネーション付きレポートなどが利用可能
- ✓ 大容量データのインポート（100GB 以上）や拡張機能に対応

■Power BI Embedded

- ✓ ユーザー単位課金ではなく、キャパシティベースの従量課金モデル
- ✓ アプリケーションに BI ダッシュボードやチャートを埋め込み可能

5.3. Power BI ライセンス概要

ライセンスプラン比較

プラン	Power BI Pro	Power BI Premium Per User	Power BI Embedded
Power BI Desktop を使用してレポートを作成する	●可能	●可能	●可能
共有およびコラボレーションのためのレポートの公開	●可能	●可能	●可能
高度な AI	×利用不可	●可能	●可能
高度なデータフロー	×利用不可	●可能	●可能
高度なデータマート	×利用不可	●可能	●可能
XMLA エンドポイントの読み取り/書き込み	×利用不可	●可能	●可能
ユーザーごとの有料ライセンスなしでの Power BI コンテンツの使用	-	-	●可能*
モデル メモリ サイズ制限	1GB	100GB	プランによって異なる
Power BI データセットのリフレッシュ レート	8/日	48/日	48/日
最大ストレージ (ネイティブ ストレージ)	10GB/ライセンス	100TB	プランによって異なる
データのセキュリティと暗号化	●可能	●可能	●可能

*補足：Power BI EmbeddedはPower BI レポートを自社のWebサイトやアプリに組み込むための機能。ユーザーごとに Power BI ライセンスを購入する必要がなく、提供者側がAzureでキャパシティを用意する方式。主に 顧客向けポータルなどで利用される。

5.4. Power Pages ライセンス概要

Power Pages は、以下の3つのライセンスモデルで利用可能で、用途や予算に応じて選べます。
以下のそれぞれのプラン内容と、次のページで詳細の比較を行っています。

主なライセンスプラン

項目	概要	主な対象
Power Pages 認証済みユーザー	ユーザーがログインしてアクセスする認証制サイト用	外部向けポータルや社内認証付きサイト 利用者数が確定しており、安定運用したい組織
Power Pages 匿名ユーザー	ログイン不要の公開サイトに対応	認証不要な公開型サイト構築に適した構成

補足

- 認証済みユーザー向けライセンスは、月あたりアクティブユーザー数で課金され、個別のユーザー操作に応じた制御が可能です。
- 匿名ユーザー向けライセンスは、外部公開サイトや一方向の情報提供（申請・閲覧など）に向いており、ユーザーごとのトラッキングや制御は難しくなります。
- Dataverse やセキュアな業務処理を伴う場合は、認証済みユーザー向けが推奨されます。

まとめ

■認証済みユーザー

✓ 会員サイトや社内ポータルなど、ログインが必要なサイト向け
✓ データ制御やユーザー管理が必要な業務に対応

■匿名ユーザー

✓ 製品紹介ページや申込フォームなど、公開用サイト向け
✓ ユーザー登録なしで誰でもアクセス可能、情報発信用途に有効

5.4. Power Pages ライセンス概要

ライセンスプラン比較

プラン	Power Pages 認証済みユーザー	Power Pages 匿名ユーザー
ライセンス課金単位	月ごとの認証済みアクティブユーザー数（ログイン基準）	ページビュー数またはセッション数
カスタムの色、フォント、ロゴを含むブランド化されたサイト	●可能	●可能
カスタマイズ可能な事前構築済みテンプレート	●可能	●可能
事前構築済み Dynamics 365 アプリケーション テンプレート	●可能	●可能
フォーム、データ グリッドなどを Microsoft Dataverse に接続する	●可能	●可能
コンテンツ配信ネットワークの有効化	●可能	●可能
システム テーブル、カスタム テーブル、および仮想テーブルへのアクセス	●可能	●可能
Dynamics 365 テーブルにアクセスする	●可能(ユーザーがD365ライセンス所持時のみ)	●可能(ユーザーがD365ライセンス所持時のみ)
Microsoft Dataverse データベース容量	2GB	500MB
Microsoft Dataverse ファイルの容量	16GB	4GB
アクセス要件	サインイン要	サインイン不要
セキュリティロールの適用	●可能	✕利用不可

5.5. Copilot Studio ライセンス概要

Copilot Studioは、以下の3つのライセンスモデルで利用可能で、用途や予算に応じて選べます。
以下のそれぞれのプラン内容と、次のページで詳細の比較を行っています。

主なライセンスプラン

項目	概要	主な対象
Copilot Studio 月額	定額で月25,000メッセージ分利用可能。（25000メッセージを超過した場合は利用できなくなり、ライセンスの追加購入が必要。）独立利用や外部展開対応します。	社外エージェントや大容量訓練利用など中～大規模向け
Copilot Studio 従量課金	利用したメッセージ分だけ後払い、前払い不要でスケーラブル	スモールスタートや変動利用量に柔軟に対応したい組織向け

まとめ

■Copilot Studio（月額）
- ✓ 25,000メッセージ分の安定利用が可能
- ✓ 社外展開や安定した月間運用に向いている

■Copilot Studio（従量課金）
- ✓ 初期コスト不要、使用した分のみ課金
- ✓ 利用量が読みにくい、もしくは試験導入・PoCに最適

5.5. Copilot Studio ライセンス概要

ライセンスプラン比較

プラン	Copilot Studio 月額制	Copilot Studio 従量課金
含まれるメッセージ	25000メッセージ	従量課金
生成 AI	●可能	●可能
独自のエージェントおよびエージェント フローの作成とあらゆる場所への公開	●可能	●可能
Microsoft 365 Copilot を拡張するための独自のエージェントやプラグインの作成と公開	✕利用不可	✕利用不可
作成するもの	独自のエージェント	独自のエージェント
エージェントのアクションとしての Power Automate クラウド フロー	●可能	✕利用不可
標準 Power Platform コネクタ	●可能	●可能
プレミアムおよびカスタム Power Platform コネクタ	●可能	●可能
Power Platform コネクタでのオンプレミスとクラウド サービス間のデータ転送	●可能	●可能
Dataverse for Copilot Studio	●可能	●可能
マネージド環境	●可能	●可能
エージェント/プラグインを公開できるチャネル	外部・内部チャネル	外部・内部チャネル